僕は後悔していない

彼女は、そんな悲しげな僕の表情をつかんだのか、
玄関で、ズック靴をはく僕を見ながら、
「ついて行っていい？」と小声で言った。
声が小さくて、聞き取れないぐらいだった。
僕は、その意味がわからなかったが、
「うん」と、ズックに足を
つっこみながら、うなづいた。
彼女もそばの下駄箱からズックを出してはいた。
僕と彼女は無言のまま、戸口を出て、
庭を通り、門を出た。
竹やぶを左に、静かになった保育園を右に
見ながら、表通りの、表門へ向かって歩いた。
少し、僕は早足で、彼女は遅れるようについて来た。
その時、丁度、彼女のお母さんと、
近所のおばさんが、日傘をさして、
お喋りしながら、買い物から帰ってきた。
僕は、ドキッとしたが、声がでない。
その二人のおばさんに対して、僕は、本当は、
彼女の後ろか、横にいたい気持ちだった。
そのまま、僕は、お母さんとは、お互いに、
視線を合わせたまま、無言で、通りすぎた。
その時、二人からは、彼女は、
僕の後ろに隠れるように見えたのだろう。

120 僕は後悔していない・・・・・・・・・・・・・574

萩原良昭